

“いやし”の空間としての武庫川の価値

田村博美*

1. はじめに

武庫川は兵庫県南東部を流れ大阪湾に注ぐ流域面積約500km²、最下流部氾濫域を含めた流域圏面積約580km²、幹川流路延長65.7kmの兵庫県管理の2級河川である。また流域圏内には人口約140万人を擁し、阪神都市圏の重要な河川であるとともに、全国の1級河川と比べても遜色ない河川である。とくに三田市、神戸市北部、西宮市、宝塚市、伊丹市、尼崎市など阪神間主要市街地を貫流し市民生活にも密接に関係するシンボル河川である。

しかし、1960年代初め頃から武庫川溪谷入り口付近に新規ダム計画が持ち上がったことにより、下流地域を中心にダム論争が武庫川の主要課題となり今日に至っている。2004(平成16)年に始まった「武庫川流域委員会」の長年に渡る真摯な議論を経て、武庫川水系河川整備計画が2011(平成23)年に決定され、これまでの治水論議に一応のけじめがつけられた。この間の経緯については筆者らによる「ダムに頼らない武庫川の川づくりとまちづくり」¹⁾を参照されたい。

当然、河川の安全を確保するための治水は最重要課題であることは論を待たないが、一方で川の備えるさまざまな機能や効用をどのように引き出し、活用するかという課題もたいへん重要なことである。しかし、武庫川ではそのような幅広い視点からの議論や活動が、新規ダム問題のために他の河川に比べて希薄になってしまったと言えよう。

武庫川水系河川整備計画にもとづく新たな川づくりがはじまるのを契機に、改めて市民生活と武庫川の関係を広い視点から調査研究し、「川まちづくり」という視点からよりよい地域づくりや魅力あふれる武庫川づくりに取りかかる必要があると強く認識する。

筆者は「武庫川流域委員会」委員として、またその後結成された「武庫川づくりと流域連携を進める会」代表として、専門領域である川まちづくりの観点から提案や活動をしてきた。その立場からとりわけ武庫川下流地域の福祉施設や福祉系学校が集積する地区に着目し、川と一体となった川まちづくりの視点と“いやし”の空間としての武庫川の価値について考えてきたことを本稿で主張したい。

本論の構成は、全国の川まちづくりの動向と川のいやし効果活用事例を紹介し、武庫川の今後の課題整理

を踏まえた上で、“いやし”の空間としての武庫川の価値について論考し、最後に目的遂行のための活動と課題について述べる。

2. 研究フィールド

2.1 川づくりまちづくりの動向

全国的には都市と川の関係の変化を受けて、1987(昭和62)年に「ふるさとの川モデル事業」が創設され、多くの都市で水辺を活かした都市づくりが進んだ。その後、1998(平成10)年の河川審議会や都市計画中央審議会による「河川が都市の顔として、その地域の風土や文化の象徴となっている都市も多くある――河川が本来有している多様な役割は、これらを改めて再認識することでまちづくりにおいても積極的に活用し――」との認識のもと、国から「河川を活かしたまちづくり」の方向が出された²⁾。良好なまちと水辺が融合した空間形成の円滑な推進のために、ソフト、ハードの両面から必要な支援を行う「かわまちづくり」支援制度である。この施策を受けて広島市旧太田川、大阪市道頓堀川、山形県最上川など、2009(平成21)年までに80件が認定されている³⁾。

また近年、地域の河川を市民生活の一部としてより積極的に取り入れ、多自然型川づくりをはじめ、環境学習や川に学ぶ活動、川のもついやし効果の活用など現在ある河川空間を活用した川まちの一体的有効活用の事例も見られるようになった。川と福祉・医療、川と教育などへの積極的取り組みもその一つである。

2.2 川のいやし効果と活用事例

川のいやし効果活用事例は、秋田県本荘市子吉川「癒しの川」、東京都荒川「福祉の川づくり」、島根県吉田村斐伊川水系深野川「ケアポートよしだ」など、十数地区での取り組みがある。北海道石狩川では、「まち・川づくりサポートセンター」を組織し、川を活かした様々なまちづくり活動の実現を目指している。また多摩川では「多摩川癒しの会」が障がい者や高齢者を川に案内する活動を行っている。

一方、その基礎的条件となる「川のいやし効果」については、秋田県子吉川のほりに立地する本荘第一病院の調査例がある。入院患者の約80%が川を眺めており、その理由が「心が安らぐ」「気持ち落ち着く」「病

*武庫川がっこう/(株)TH都市デザイン研究所/大阪市立大学

表1 まちづくりと一体となった武庫川づくりに向けて

「まちづくりと一体となった武庫川づくりに向けて」提案骨子

1. まちづくりと一体となった武庫川づくりに向けて
(1) 川の役割の変化と今後の川づくりの視点
(2) 武庫川の立地特性と変化に富む周辺環境との連携
(3) 流域人口の減少と土地利用の変化を視野に入れた計画づくり
(4) 流域連携の基礎づくりと武庫川を守り育てる仕組みづくり
(5) 武庫川づくりのための基礎資料づくり
2. 武庫川づくりの基礎資料の整備と活用
(1) 武庫川カルテの整備と公表および活用——後に武庫川ガイドブック作成と発刊につながる
(2) 武庫川塾ネット（仮称）の整備と活用
(3) 環境を軸とした上中下流の連携
(4) 川づくりにつながる川の学習
(5) 武庫川「流域文化」の育成と伝承
3. 武庫川らしい流域景観の保全と創出
(1) 武庫川100年の風景づくりにむけて——歴史・文化景観の保全と再生
(2) 田園景観と調和した流域景観の保全と創出
(3) 峡谷景観の保全と育成——武田尾渓谷自然景観の保全と育成・文化的景観として位置づけ
(4) 都市景観と一体化した景観の保全と創出——三田や宝塚中心市街地景観、橋の活用など
(5) 武庫川の景観を活用した都市景観の整備
4. 河川空間のあり方と都市的活用を見直す
(1) 高水敷や堤防など線的空間利用の工夫および沿川空間の活用
(2) 河川空間の都市公園的利用の見直し
(3) 河川と都市の交流促進策として「川まち交流拠点」の整備——後に「むこにゃん広場」整備他
(4) 武庫川と都市・田園・水・みどりネットワークの整備

武庫川の総合治水へむけて提言書 pp129~155 より項目抜粋

院にいることを一時忘れさせてくれる」という答えであったことが契機になって、現在の『川での福祉と教育の全国大会』に発展した⁴⁾。この大会は2000（平成12）年から継続的に開催され、いやしの川づくり活動を支えている。

事例研究として柏谷・他の研究⁵⁾では、「河川空間やそこでの活動により、心因性疾患及び身体の病気に対する各段階における補助的効果への期待として約7割が『期待できる』としている」とし、杉田・他⁶⁾の研究でもストレス緩和調査により川のいやし効果が確認されている。

3. 武庫川のもつ多様な機能の活用について

3.1 武庫川のもつ多様な機能活用への提案と課題

武庫川流域委員会では武庫川のもつ多様な機能に着目して、表1のように川まちづくりに関する多くの具体提案を行った⁷⁾。

河川の主要機能として治水・利水・環境の3つがあげられ、河川整備計画にはこれらの視点から具体計画が記述されることになるが、多くの場合、環境概念としては動植物の生活環境や水質など、河川整備を実施する際の留意事項の列記程度しか記述されないことがほとんどである。武庫川でも同様であり、せつかくいろいろな視点から幅広く提案がなされても、どこにも受け皿がないため無に帰すということになる。

武庫川の場合、河川管理は兵庫県、河川の高水敷地は沿川の市が公園・緑地として占用し管理、堤内地のまちは市の都市計画部門が主に管理、といった縦割り状況である。同時に市境界で諸々の管理が分かれるという条件も加わり、地域にふさわしい川まち一体の地域づくりが困難な状況である。

このような八方ふさがり状況に風穴を開けるには市民主導で地道に努力を重ね、流域市民が連携し実践的な活動を継続することにより、県や流域市の意識を変えていくことが重要である。また、市民が協働・連携し可能などころから着実に実践していくことを、行政も支援していくことが強く期待される。

3.2 武庫川の課題と今後の市民活動の方向

筆者は図1に示すように、武庫川水系河川整備計画が策定され今後20年間にわたる河川整備が進められるにあたり、武庫川で取り組むべき課題に対し、活動団体や市民が役割分担して取り組む内容を整理し提案した。流域市民や活動団体はもとより、2011年7月に設立された武庫川流域圏ネットワーク、2012年5月に設立された武庫川市民学会などの協働や市民活動団体の相互連携により取り組むべき課題と方向、およびその仕組みを含めた今後の流域での活動イメージである。

2012年から新たな武庫川整備が始まり、県、流域市および流域市民の関心も最下流域の武庫川河川改修に焦点が集まっている。河川敷の樹木保存や多自然型川づくり、地域と一体となった景観の保全など河川整備



図1 武庫川流域の課題と今後の活動イメージ

のあり方やプロセス監視がたいへん重要であることは論を待たない。

一方、今後 20 年間にわたりほとんど現状維持の状態が続くその他の河川区域についてはどうであろうか。このことについては整備計画でもほとんどふれられていないし、行政からの新たな提案も見られない。

3.3 武庫川の川まちづくりといやし効果の活用提案

武庫川での活動として筆者が着目したのが、図 1 の

武庫川水系河川整備計画区域外における「B2②川空間活用」である。多くの資金投資により整備されてきた河川敷を初めとする社会資本ストックをどのように活用し、地域と一体となった魅力ある川づくりや地域づくりを行うか、非常に重要な事項であると認識する。

全国の河川では 2.1, 2.2 で紹介したように、川とまちづくりが一体となった先駆的な地域づくりや、河川周辺の土地利用特性を活かした河川空間の利用が試行され実践されてきた。しかし武庫川では、川まちづく

いやし（福祉）の里川づくりモデル地区図



図 2 いやしの里川づくりモデル地区位置図

りの一体型事例として、1992年に建設省から指定された、宝塚中心市街地における「マイタウン・マイリバー事業」による河川改修と市街地再開発事業の一体施行例にとどまり、河川行政と都市行政が一体として地域づくりを行うという実績はほとんどみあたらない。同時に、福祉施策と河川施策の一体的運用という提案や実例も無い。

図2に示すように、武庫川下流の仁川および天王寺川との合流地点上下流付近には、多くの福祉施設や福祉系の学校が存在する。武庫川の河川空間を学校教育や福祉施策、市民の健康増進、環境教育、減災対策など複合的な目的のために、有効活用し、ひいては流域の魅力あるシンボル河川として再生することは重要な視点である。多様な市民が川に関心をもち川の空間を生活の一部と捉えるようになると、地域の魅力向上にも資することになる。このような視点で武庫川を捉えるようになったのは、「武庫川ガイドブック」⁸⁾づくりの過程においてである。川のいやし効果が期待されるならば、それを周りの福祉系施設や学校はもとより一般市民にも活用すべきであると考えられる。

4. 武庫川「いやしの里川づくり」に向けた取り組み

4.1 武庫川「いやしの里川づくり」モデル地区

武庫川下流の福祉系施設や学校の立地経緯については未調査であるが、施設立地が始まったのは昭和30年代である。この地域がもともと流域末端地域として水が集中する地域であったこと、宝塚市、伊丹市、西宮市、尼崎市の4市の行政界が武庫川を中心として接し、どちらかという工業系や流通系などの土地利用が優



写真 むこにゃん広場と第2回へそカーニバル

先される地域であったこと、当時の社会状況から街中への立地が困難であったことなどから、この地域に福祉系施設や学校が集中立地することになったのではないかと推察される。

しかし、現在の整備された武庫川の河川空間を評価すれば、これらの施設・学校は環境的に非常に有利な立地にあると考えられる。積極的に武庫川の河川空間を活用することにより、入所者や通学者のいやしや学習、健康効果を増進させることが期待できる。

一方、市民にとっても武庫川にいやし効果があればこれを求めて多くの市民が武庫川に集うことになる。これらの福祉系の市民と一般市民が武庫川の空間を介して交流し団らんし、協働の作業を行うことが出来れば、武庫川らしい個性ある川まちづくりを創出できるのではないかと筆者は考えている。

4.2 武庫川「いやしの里川づくり」モデル事業

筆者は2012年初めから当該地域をモデル地区として捉え、3つの活動を実施してきた。①武庫川・いやしの里川づくり研究会、②むこにゃん広場と花畑整備、③

表2 武庫川周辺に集中立地する福祉施設・学校

	施設名称	運営主体	住所	施設種類・内容	立地経緯・施設概要・条件等
1	はんしん自立の家	(社福)ひょうご障害福祉事業協会	宝塚市美幸町 11-16	●障害者支援施設 18歳以上 50名	1985年(S60年)オープン
2-1	阪神福祉事業団ななくさ学園	(社福)阪神福祉事業団「西宮市山口町」	西宮市田近野町 8-1	●知的障害者ショートステイ 18歳未満	■尼崎、西宮、伊丹、宝塚、川西が対象
2-2	阪神福祉事業団ななくさ清光園	(社福)阪神福祉事業団「西宮市山口町」	西宮市田近野町 8-1	●知的障害者ショートステイ 18歳以上	■西宮、伊丹、宝塚、川西が対象
3	阪神福祉法人尼崎武庫川園	(社福)尼崎武庫川園	西宮市田近野町 7-32		
3-1	同上 武庫アルデンハイム	同上	西宮市田近野町 7-32	●特別養護老人ホーム ショートステイ	1982年(S57年)設立 ■西宮、尼崎、宝塚、芦屋対象
3-2	同上 松の園	同上	西宮市田近野町 7-32	●知的障害者入所授産 ショートステイ、日中一時支援	1970年(S45年)設立 ■西宮対象 ■日中一時支援は西宮、尼崎対象
3-3	同上 第1松の園	同上	西宮市田近野町 7-32	●知的障害者通所授産	2005年(H17年)設立 ■西宮、尼崎、宝塚対象
3-4	同上 第2松の園	同上	西宮市田近野町 7-32	●	
3-5	同上 リーブ・フルーリー	同上	西宮市田近野町 7-32	●生活介護、施設入所支援、短期入所、日中一時支援	2002年(H14年)設立 ■西宮対象
3-6	同上 カトレアの園	同上	西宮市田近野町 7-32	●身体障害者授産施設 18歳以上 定員入所50名、通所10名	1977年(S52年)開園
4	社会福祉法人福成会清流園	(社福)福成会	尼崎市西昆陽 3-39-1	●知的障害者 定員50名 職員20名 陶芸、紙漉き、クッキー、さをりづくりなどの軽作業及び運動系や農園系の活動。	1990年(H2年)開所 H11年に清流園武庫之荘分場会所(定員15名)
5	老人ホーム一里山荘	(社福)和光会	西宮市一里山町 14-23	●軽費老人ホーム 定員50名	1975年(S50年)開設 軽費老人ホームB型
6	にしのみや聖徳園	(社福)聖徳園	西宮市段上町 6-24-1	●特別養護老人ホーム定員57名 ケアハウス15名 ショートステイ13名	
7	兵庫県立阪神特別支援学校	兵庫県立	西宮市田近野町 11-7	●小学部、中学部、高等部、訪問学級	1965年(S40年)尼崎市立尼崎第二養護学校として開校。S43年田近の-33に校舎新築移転。S50年県立移管、兵庫県立阪神養護学校に校名変更。
8	尼崎市立尼崎養護学校	尼崎市立	西宮市田近野町 10-45	●肢体不自由児童・生徒、小学部、中学部、高等部	1958年(S33年)開校。1960年(S35年)現在地に移転。1969年(S44年)境界変更により西宮市となる。■尼崎在住の児童・生徒のみ入学
9	兵庫県立こばと聴覚特別支援学校	兵庫県立	西宮市田近野町 8-8	●聴覚障害の児童・生徒、保育相談部、幼稚部	1975年(S50年)開校。

武庫川のへそカーニバルである。いずれも市民主導の活動である。

1 点目は武庫川にいやし効果があると評価されているのかどうか、どのような動機や目的で武庫川を活用しているのか、今後の河川空間活用にあたりどのような課題が存在するのかなど、周りの福祉施設や学校利用者に対する意向調査を行った。同時に一般市民にも同様の調査を行い比較検討した。

2 点目は調査研究と平行して河川敷地にアドプト制度^{注1)}を活用し、交流拠点およびイベントコーナーとして広場整備を行った。広場は「むこにゃん広場」とネーミングし、多様な市民相互の交流拠点や安らぎ拠点とした。広場の周りには季節の花畑の整備や草刈りアートを行い、武庫川に新しい市民広場の形成を目指した。花畑整備にあたり福祉施設の障がい者や学校の生徒も作業に参加するなど、交流の輪も広がりつつある。

3 点目は「むこにゃん広場」や周りの福祉施設を活用したイベント開催であり、「武庫川のへそカーニバル」と称している。これはこの地域がちょうど武庫川流域の端末にあたり武庫川でも重要な位置にあること、福祉施設や学校などが集積し多様な市民層との新たな絆づくりを創出する可能性が大きいこと、などから名付けた。2012 年から 2 回開催し、障がい者や親子連れなどがゲームや自然観察などを楽しんだ。このような活動は緒に就いたばかりであるが、福祉施設や学校、地域の理解と協力のもと、市民有志の積極的な活動と助成金^{注2)}により具体的効果が発揮されつつある(写真)。

5. いやしの里川づくり調査研究の概要

いやしの里川づくりに関する調査研究は関西学院大学総合政策学部久野研究室と筆者の主宰する市民団体との共同研究として取り組んだ。また同時に研究者、実務者、行政関係者による「武庫川・いやしの里川づくり研究会」と別途ワーキング会議を設け、市民目線からの提案も含めて実践的な取り組みを行った。

調査は 2012 年 9 月から 10 月にかけて表 2 の武庫川の周辺地域に立地する福祉系 6 施設と学校 3 校の職員及び利用者を対象に、アンケート調査により実施した。調査方法は筆者らが直接施設などを訪問し、550 の調査票を配布し、うち 357 の有効回収票を得た。同時に施設や学校の立地環境、武庫川とのつながりなどアクセス条件なども調査した。

平行して一般市民についても同様の調査を実施したが、個人情報保護法との関係により市民団体が不特定多数の市民に対してこのような調査を実施することは困難であるため、『武庫川ガイドブック』⁸⁾直接購入者および筆者の属する団体が実施している武庫川探訪の登録参加者を対象に、郵送配布回収方式により実施した。配布回収状況は、150 票の配布のうち 103 票の回収であった。これらの集計分析結果については後日別稿で詳細に公表の予定であるが、最も関心の深い「武庫

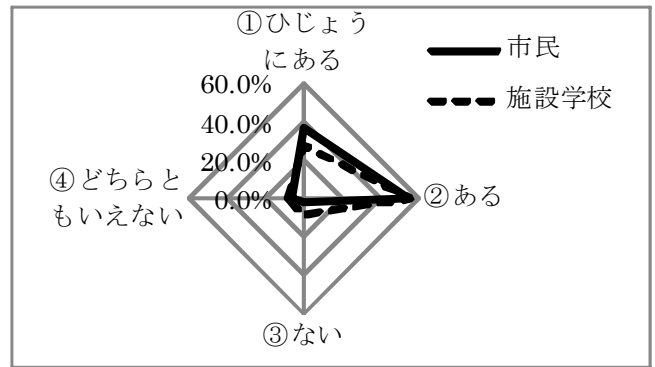


図 4 武庫川のいやし効果についての評価

川のいやし効果」の有無について、各層の評価のあらましを紹介しておく(図 4)。

福祉系施設・学校関係者は「いやし効果がとてもある」が 22%、「いやし効果がある」が 58%で、合わせて 80%の人が「武庫川のいやし効果」について評価している。「いやし効果がとくにない」は 13%にとどまった。

市民は「いやし効果がとてもある」が 37%、「いやし効果がある」が 55%で、合わせて実に 92%の人が「武庫川のいやし効果」について評価している。「いやし効果がとくにない」は 2%であった。

このように、両者ともに武庫川のいやし効果についてたいへん高い評価をしていることが今回の調査で明らかにされた。中でも市民の評価が高いのは日頃から生活の一部として武庫川を利用し、施設・学校よりもなじみがあるからであると推察される。いやし効果の具休内容についても詳細な分析が必要であるが、この結果を基にして様々な武庫川の川まちづくりを行う基礎的条件が整えられ、今後の市民活動にむけての強力な動機付けが示されたと言えよう。

6. 市民活動組織「武庫川がっこう」の活動と課題

筆者らは武庫川の備える「いやし効果」を福祉施設・学校関係者はもとより市民各層においても積極的に活用する目的を掲げ、2012 年 10 月に「武庫川がっこう」を設立した。会則にはこの目的を含め、武庫川を「守り」「育て」「活かす」「学ぶ」ことを目的とし、地域づくりと一体となった活動を行うことがうたわれている。

「いやしの里川づくり」として、調査研究の継続、むこにゃん広場と四季の花畑の整備、むこにゃんスケッチクラブ、水辺ビオトープなどにも挑戦する予定である。また従来から進めている「武庫川探訪」に加えて、いろいろな視点からの「武庫川勉強会」、むこにゃん広場を活用した定期的な遊ぼう会と「武庫川のへそカーニバル」の開催など、地域ぐるみで「いやしの里川づくり」を目指している。しかし、これらの推進のためには多くの課題もある。活動出来る市民の高齢化、福祉施設や学校の設立目的の違いによる連携・協働の限界、河川行政の制約、行政の支援体制などである。

これらの課題にチャレンジしながら少しずつ実現に

向けて取り組みたいと考えている。

謝 辞

本調査研究にご協力を頂いた福祉施設と学校関係者および市民の方々、研究会メンバーの皆様、アドプト制度活用による支援を頂いた兵庫県、宝塚市の関係者ほかに深く感謝する。

脚 注

注1) アドプト制度：道路や河川などの公共エリアの草刈り、植樹管理などの維持や美化活動を、県民と協働して行う「ひょうごアドプト制度」のこと。

注2) 助成金：「はぁ〜とふるファンド」や「KJB 瀬戸内基金」などを活用した。

参考文献

- 1) 村岡浩爾, 田村博美, 佐々木礼子 (2011) ダムに頼らない武庫川の川づくりとまちづくり, 環境技術, **40**(11), 690-694.
- 2) 勢田昌功 (2009) 地域づくりと河川の関わりの変遷と今後の課題, 都市計画, **58**(2), 9-12.
- 3) 古市秀徳 (2009) 「かわまちづくり」支援制度の創設, 月刊地域づくり, 245号, 28-30.
- 4) 小松寛治 (2004) 川の癒し効果を医療に実践, 月刊地域づくり, 179号, 34-35.
- 5) 柏谷 稔, 近藤清久, 藤田勝, 石井千万太郎, 清水浩志郎 (2000) 「癒しの川」に向けた川づくりに関する一考察, 土木学会第55回年次学術講演会IV-425, 2.
- 6) 杉田克生, 野村純, 菅谷茂 (2010) 多摩川に集う人の癒し効果：ストレス緩和調査にもとづく多摩川に関わる自然保護活動, (財)とうきゅう環境浄化財団「助成調査・試験研究の成果報告書 2009年1月13日付第2008-20号」, 16pp..
- 7) 武庫川流域委員会 (2006) 武庫川の総合治水へむけて 提言書, pp.129-155.
- 8) 田村博美+武庫川づくりと流域連携を進める会編著 (2011) 武庫川・かわまちガイドブック 武庫川・まちなみ探訪, 128pp., 三帆舎, 宝塚.